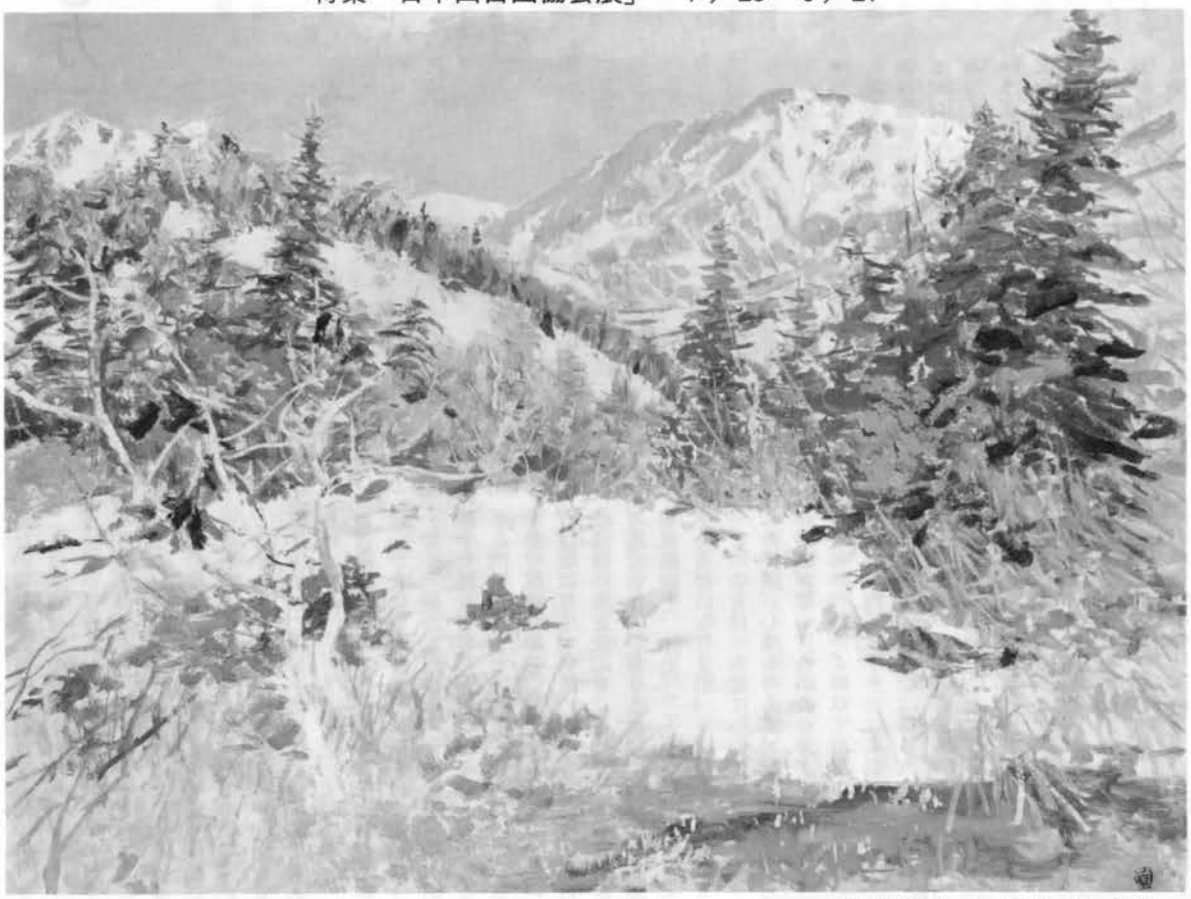
山と博物館

第39巻 第7号 1994年7月25日 大町山岳博物館

特集「日本山岳画協会展」 7／23～8／21



初夏の高原 足立真一郎

日本山岳画協会展開催にあたって

日本山岳画協会

日本山岳画協会は、好んで山を描く画家の集団として、それぞれの道に精進していた人々を横に連ねて、互いに親しみを増し、作画にも、発表にも便宜を加え、鑑賞や研鑽の機会を多くしようという目的で発足いたしました。

足立源一郎、中村清太郎、石井鶴三、茨木猪之吉等を創立会員として発足以来、本年で五十八年になりました。

題材は、狭く山岳と絞らず、山麓も、山に生きる動植物、山にからむ民話伝説、天象、人の生活まで広く題材を求めています。

毎年一回、東京において定例展を開催していますが、このたび大町山岳博物館のご協力によりまして特別展を開催する運びとなりました。

今回は特に大町市制四十周年の記念の年であり、ご来館の皆様にご高覧いただけますことを、大変幸せなことと深く喜びを感じている次第です。

この好機を迎えられましたことは、大町山岳博物館のご好意とご協力の賜物と、心より感謝申し上げる次第です。

「山の描き方」

関戸紹作

山の美しさ、雰囲気に魅せられて、山に登る者が増えて来た昨今、その美しさを自分なりの技量でスケッチしておきたい。そういう山の愛好家を対象に、限られた紙数の中ですが「山の描き方」について解説を試みてみようと思います。

【絵を学ぶにあたって】

このことは、絵を始める者にとっては大切なことなので、くどいようですが少し紙数を多くして考えてみたいと思います。

●「絵を描きたいと思うので、描き方を教えてほしい。」と言って来る方が多くなりました。「鉛筆はどんな鉛筆で」「杉の木は何色と何色を混ぜたら」。たしかに経験者から技術的な手ほどきを受けて描けば、経験者が苦労した時間と労力がはぶけるように考えられます。しかし「絵を描く」ということは、自分の得た感動や感情を訴える作為であって、そのこと自体が、ひとつひとつ未知への新しい試みであるわけです。ですから、技法を修得する方法も、経験者が各々が開いた技法を学ぶと同時に「自分で工夫し、試みる」心掛けが何よりも大切なことではないかと思います。

えてして、失敗を恐れるがために経験者から教えを求めることがありますが、その失敗を恐れると、その失敗の本当の意味が理解できないまま、きれい事の絵を描くことで終わってしまい、本当の進歩は望めないことにもなります。

尾瀬　関戸紹作（パステル）

●「うまい絵」と「よい絵」を考える。

「絵は簡単だよ。描き方の要領を教われば、後は自分で描いていればその内にうまくなる。」たしかにそのことは、早い、おそいはあっても当てはまることと思います。しかし「うまい絵」と「よい絵が描ける」ということと同じであるか考えてみる必要があろうと思います。

例えば、画面の隅々まで個々の物を克明に上手に描いていながら、この人はどんなことに感激して描いたのかなと思える、感動を訴えない物の説明描写に過ぎない絵があります。これは「描き方の要領をマスターすれば、うまい絵が描ける」という認識の結果の絵であろうと思います。

また一方には、一見、稚拙と思える描き方であっても、見る者の心をゆさぶる作品に会うことがあります。このふたつの絵の違いがどこから生れるのか考えることが大切と思います。このことは、画家生涯の課題でもあるわけですが。

●こう考えてみると、指導書や指導者との出合いが大切であることに気が付くでしょう。

よく、絵の入門書を何冊か読んで絵を始め、誤った概念をもち、悪い癖がなおせず行きづまる例があります。入門書を読む場合、効果を急ぐ気持ちから、絵画の本質を説いている頁はとばして、明暗の描き方、色の作り方等、技法面のみを読んで、それで勉強していると考えている人がおります。これは、文字通り本末転倒で、「仏作って魂入れず」の結果を招くことになります。

このことは、先生についても同様です。本人の感激、心情も考えず、やれ構図が悪い、色のぬり方が悪いとか、あげくのはては筆をとって作品に手をつけてしまう人がいます。絵は描く人の心の感激、心情の表現ですから、学ぶ人のいいところを見つけ出し、それを伸ばしてくれる先生につくことが大切です。入門書と同じで、構図のこと、着彩のことなど技法を直接教わらないと、教えてもらっていない、進歩していないと不安を感じるかも知れませんが、学んでいる道が、絵画の本質を求める道からはずれている道でないか、どうかを考えることも大切です。「絵画の本質」。それはむずかしいことで手短かに説明できませんが、先輩の考えを聞いたり、良い作品を見ることで、だんだん理解を深めるようにつとめましょう。

〔道具について〕

鉛筆から油えのぐまで。それだけで割り当ての紙面を使ってしまいますので、この項は、〔現場で描く〕項でふれ、不十分な点は後記の参考図書での研究にゆだねさせてもらいます。それも、自分で工夫、開発する足がかり、と解釈していただくことが前提です。

〔現場で描く〕

写真だけ撮って来て、それを見ながら絵にする、という人もいますが、現場で、画面を構成する雰囲気、印象をしっかり把える写生をすすめます。それは、個々の対象を丁寧に描いても、全体の雰囲気、色調、強く印象に残る美しさを、心でとらえてなければ、絵にならない、説明的なものに終わるからです。

マッターホーン　牧　潤一（ボールペン）

鉛筆・コンテで

山の形も、裾をひいたような姿。体内から筋肉がもりあがっているかのような、若さを感ずる姿。人体同様に、色々な姿を感じられます。芯の太さ、硬軟を使いわけて、山稜の線を描きわけ、山の性格を把えてみます。

また、制作の過程で前景に樹木等を描いて、遠近間を出す試みをしますが、それは、山を主体とするか、中景、前景に主体が移るかの問題ともからんできます。あくまで、「主題を効果的に表現する目」で構図は考えることです。

また、目立つ色と明かるさとを混同することがあり、色をぬる描写で、遠近感が出ない場合があります。明度で正確に把える目の訓練のためにも、単色でスケッチする仕事は大切にしたいものです。

槍　江村真一（サインペン）

ボールペン・サインペンで

鉛筆で下描きをせず、ボールペンでぶっつけ描くことは、緊張を覚えます。部分的な形の把握の目で描き進めると、尾根の形のバランスを狂わせ、ひいては、山容から受ける印象の描写が失われてしまいます。ですから、尾根相互の高低、長短のバランスを見くらべながら、印象を描写していく目は、人体デッサンと同じです。「描きなおしがきかない」緊張感が、「見る目」を育てます。尾根の線の強弱も、サインペンの力の入れ方で、太い、細い、かすれで抑揚が得られ、陰の描写は、古いペンのかすれを効果的に使います。

甲斐駒　江村真一（筆ペン）

筆ペンで

あこがれの山へ行くと、何もかも描きたくなり、全体の印象がまとまらない。こんな時、部分にとらわれず、大きく把えるために、筆でぶっつけ描くことが勉強になります。稜線、谷の陰影等、筆先で太い、細いを描きわけ、スピード感、力量感を表現します。

色鉛筆で

全体の雰囲気、光による調子、色調の描写等、時間の許せる限り、丁寧に試みてみます。

用紙にざら目の厚目の紙（ワットソン等）を使うのは、紙面の凸部に鉛筆の芯がひっかかり、のり易いのです。ですから、鉛筆を走らせる時は、力を抜いて根気よく走らせるのがこつです。

混色方法は、筆者の場合次の要領です。二色の色の混色で例をとると、明るい色、暗い色の順で色をかけ、なお落ち着かせるため、明るい色を最後にかけてみます。この手順はパステルでも、ほぼ同じです。

それでは写生に移りましょう。現場で写生を見ていると、遠い山の岩場を、焦茶色で描いているのを見ます。聞いてみると「あそこは岩場だから」という返事です。野外では、遠くなればその物がもつ個有の色が失われて、青味がかかって来ます。その事を確かめてみてください。しかも、それも側に来る色との組み合わせで、色が変わって見えて来たり、日光の加減、湿度でも大きく変わります。概念にとらわれず、現場から学ぶ気持ちで見つめ、形も色も相互のバランスで見る目を養うよう努力しましょう。

その過程の中で「今、自分は何が美しくて、何に感動して、どう描こうとしているのか」確かめながら、対象と自分の気持ちと画面の間を見つめながら、描き進めるようにします。

このことは、用具に関係なく、絵を描く時考えねばならないことです。

パステルで

パステルもパステル鉛筆も、混色方法は色鉛筆の場合と同じ要領です。ただし、パステルは指先等でこすり込みができます。殺筆という道具でこする事もありますが、調子の強い感じを出したい時は、指先の方が効果がねらえます。また、岩稜の突端のような、ピリッとした感じの描写の場合は、パステル鉛筆を殺筆代りに使っています。

描く手順は、現場の雰囲気によって、色画用紙か色ボードを選びます。雪山でしたら、パステルの白色の美しさが映える下地の色を選びます。下描きは、他の色をよごさないため、多くは白のパステル鉛筆で描いています。次は、雪山の雪、秋は紅葉の黄色等、他の色によって敏感に濁り易い色を先にぬってから、まわりにかかります。空の色も、山との境で、山の色で濁すことがあるので、空から先にぬっておきます。

白樺の白い細い幹等は、後から描きます。その場合、軽くフキサチーフで下の色を固定してから描くこともあります。フキサチーフは、あまり多くかけると、パステルのソフトな感じが失われますので注意します。

水彩えのぐで

描く手順として、鉛筆の下描きが普通ですが、B鉛筆と限るものではありません。対象の形をとらえる線は、その作業の中で、印象、性格をつかむための線ですから、大切にひきます。よく、「現場ではおおよそ描いておいて、

帰ってからしっかり描く」ということを聞きますが、骨組みは現場でしっかり把えておかないと、後で描いた絵は、現場の印象の無い、頭で作った説明的な絵で終わることになります。

画用紙についても考えてみます。初めの内は「大きな用紙に描きなれないと」という考えから、現場で時間も考えず大きなサイズを選び、時間足らずで十分な描き込みも出来ずに終る例を多く見かけます。これは「対象を見る目」を深める勉強にならず、ただ、適当に画面を作る悪い習慣を作ってしまいます。ですから、時間を考え、心にゆとりの持てる大きさを考え、対象をしっかり見つめられるよう工夫すべきと思います。

着彩は、普通は明るい色から先にぬります。そして、ぬった色が乾いてから次の色を上にぬります。ぼかしぬりは、色をぬる前に水をぬり、乾かない内に色をかける要領です。

また、焦茶色や紫色一色で明暗の調子を作ってから写生を進める場合がありますが、この場合、画面全体を包む主な色調、雰囲気を考えてこの描法にかからないと、画面を沈める場合があるように思います。

陰の色は暗い。この先入観から、焦茶色、紫色で処理する例が見られます。しかし、野外の場合、陰といっても、日光、周囲の反射、空気の湿度等で色が生まれ、その陰の色が、日向の色と美しい調和をもって、景色の雰囲気を作っているわけです。ですから、あくまで現場から陰の色は見つけだす仕事です。

透明描法、不透明描法どちらでと聞かれます。要は、自分の把えた山の美しさ、印象を、水彩えのぐの特性を生かして、納得する絵にしてみる、ということではないでしょうか。

ただ、えのぐの不透明性と画面の不透明性とは別です。画面では、透明えのぐと不透明えのぐの色、量の配置、バランスの如何で、透明にも不透明な画面にもなるわけで、不透明えのぐの使い方を、無意味に恐れてはならないと思います。試みることで、透明性、不透明性の特性を知ることが出来るでしょう。

油えのぐで

下描きは、木炭、または、溶き油でうすく溶いたえのぐを、硬い豚毛の筆につけて描きます。下ぬりの色は、多くは透明性の暗い色をぬり、仕上げに近くなるにしたがって、不透明性の明るい色を重ねて行くのですが、必要に応じてナイフを使って、下の色にかぶせるようにぬってみます。

槍岳遠望（燕岳付近から）　牧　潤一（水彩）

日程に二日、三日のゆとりがあれば、一夜おくと前日ぬった生乾きの色の上に、手頃に新しい色がのりますので、初日に、その手順を考えて描きはじめるのが大切と思います。その作業の場合、初日のえのぐには乾燥の早い（テレビン・ペトロールなど）溶き油をまぜないと、乾きがおそいので気をつけてください。そして二日目からは、柔らかい筆も多く使います。

また、仕事を早めるために、目的地の雰囲気を予測して、あらかじめ、キャンバスに下地の色をぬって行く場合があります。これは、パステルの色画用紙の効果と同じねらいです。

以上、簡単な説明で十分な理解は困難かと思いますが、不備な点は、文末に記した参考図書で研究を深めていただきたいと思います。

【勉強の方法について】

●えてして、水彩画を始めると「自分は水彩画さえ描けないのだから」と言って、他の用具での試みを敬遠する人が居ますが、これは考えものです。絵は「描き方の技量」だけで解決出来るものではなく、その基底に「美しさを感じとる心」「バランスをとらえる目」「印象を感じとる心」、その「目」が育たなければ、技法は十分生かすことが出来ません。「目」を育てる試みを念頭に、色々な試みを描画を通して数多くやり、新しい発見をすることをおすすめします。

●「美」「山」に関する本を読む

「人は、絵を何んのために描くのか、そんなむずかしい事は、私にはわからない」「とにかく、色々な物の描き方を覚えることが先決」こうした判断をするのもわかります。しかし作品は、本人の絵画への認識、心の在り様を端的に表わすと言われます。本も出来るだけ読み、芸術的視野を広め、深める努力をしたいものです。

（日本山岳協会会員）

【参考図書】

『山岳画の描き方』
足立真一郎（現会員）・春日部たすく（故人会員）・加藤水城（故人会員）・藤江幾太郎（現会員）・熊谷樋（現会員）・山里寿男（旧会員）共著
アトリエ出版社刊

『四季・山の描き方』
加藤水城（故人会員）著
畦地梅太郎（旧会員）・足立真一郎（現会員）・上田哲農（故人会員）・荻原孝一（故人会員）・春日部たすく（故人会員）・山里寿男（旧会員）随筆執筆
アトリエ出版社刊

『日旺画家のための油絵入門』
藤江幾太郎（現会員）著
アトリエ出版社刊

『レッツ・スケッチ山の絵教室』
初心者のための『淡彩・山の描き方』
共に　牧　潤一（現会員）著
日貿出版社刊

山と博物館第39巻第7号
一九九四年七月二十五日発行
発行所　〒398長野県大町市　TEL(0261)二一一
大町山岳博物館
印刷所　長野県大町市俵町
大糸タイムス印刷部
定価　年額一、五〇〇円（送料共）（切手不可）
郵便振替口座番号〇〇五四〇―七―三三九三